

いま、なぜ「共生」を目指すのか

勝ち負けを超える自分自身との競争を

「学生の多くが、協力しながらお互いを思いやる社会」を望んでいます。一方、人生は「競争」の連続で、将来「自分も、出世」を巡り、争いを繰り広げなければならぬという予測が示されています。(Q4, 5)

一人ひとりは優しい心根を持っていて、困った人がいたら助けたいという純粋な気持ちを持っているようです。一方で受験競争の経験や、コースで社会の動きを見て能力主義社会をひしひしと感じ、生きづらさのようなものを感じているようです。

以前、あるアスリートが、自分をほめてやりた」といふ言葉を使いましたよね。これは誰かを負かしたからよかったのではなく、自分の力を最大限に使って、自分自身の目標を乗り越えたという意味でしょう。

「共生」といって、「競争」をしなくてよい、みんな仲良く手をつないで、というイメージに捉えるかもしれませんが、それは決して現状に満足してしまつことではありません。私は「共生的競争」などという言い方をしますが、勝ち負けを超えた、自分自身への挑戦で、自己ベストを出すことによつて、それぞれが発展し活性化することは必要です。勝つためには手段を選ばないといった、「過剰な競争」は避けなければなりません。微妙なバランスが大事なのです。

Q4. 今後、社会に出て「競争」を実感するのはどのようなときだと思いますか？(自由回答: 特によく挙がったもの)

組織で	出世 / 人事査定・社内評価 / 学問
同僚と	営業成績 / 能力給 / 実績 / 昇進時期 / 結婚
家庭で	給与 / 子育て / 子の進路・お受験
その他	徒競走 / IT長者

Q5. あなたが望む「これからの社会のあり方」に近いのは?

強者が弱者を助け、協力しお互いを思いやる社会	42
それぞれの身の丈にあった無理のない穏やかな社会	28
能力・才能のある人が認められ実力を発揮できる社会	23

最近、あらゆる場面で「共生」という言葉がよく使われるようになってきました。例えば、「環境との共生」などが思い浮かぶと思いますが、この言葉は自然対人間のみにとどまらず、多元化する社会の中での人間と人間、異なる価値観などさまざまな違いを越えて、「共にいきよう」というメッセージを含んだ言葉です。

東洋大学では松尾友矩学長主導のもと、この「共生」というキーワードこそ新たな時代を切り拓く必要不可欠なものとして、大学が目指す方向性の主軸に置き、教育研究に生かす取り組みを行っています。

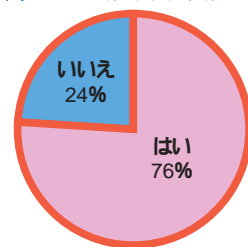
「共生」とは何か、なぜ「共生」が必要なのか。松尾学長にインタビューを行いました。

100名の学生に協力いただき、「共生」という言葉を知っているか、どんなイメージを持っているかなどアンケートしました。

1 学生の約7割は、「共生」という言葉を知っており、その多くを友人やサークルなど身近な体験の中に感じ、共生する動植物をイメージしていました。(Q1, 2, 3)

7割の学生が知っていたことは嬉しいですね。身近な例を挙げるのは、生活体験からくるものです。多くの学生は謙虚で、自分の経験の範囲から回答したのだと思います。

Q1. 「共生」という言葉を知ったことがありますか?



Q2. 「共生」からイメージすることは?(自由回答)

共に生きる / 年代や人種を超えて協調生きる / 互いを理解し、自らが成すべきことを自覚し支え合う / 価値観を認め合う / 地域と一緒に生きる / 自分に関係のある、ないに関わらず互いに助け合い生きる / 思想や生き方、身体的に異なる人たちが手を取り歩む / 人と人、人と自然、人と環境が互いを歪めることなく存在する / 福祉社会(高齢者、障害者とも一緒に生きていく) / ヤドカリとイソギンチャク / 海で「クマノミ」と海藻が共生 / もののけ姫

Q3 今までのようなときに「共生」を意識しましたか?(自由回答)

部・サークルの運営 / 苦手な人とも協力しなければならぬとき / グループで何かを達成しようとしたとき / お互いに助けが必要だったとき / 男女の差を実感したとき / 地元の話が削られ自然災害について考えたとき / 民族紛争のニュースを見たとき / 障害者と接したとき

他者があることを常に思う

「社会の出来事に関心のあるのは何かを聞いたところ、国際政治とりわけ紛争国や途上国問題に関心を寄せる学生が少なくないことがわかりました。このような関心が身近な問題として意識できるようにになると、広い視野での「共生」意識が生まれるのではないか。(Q6)

皆さんには、想像力を鍛えて、体験したことがないからわからないから「歩踏み出して欲しい」新聞やコースである程度知ることができると、事実を頭の中で描き、シミュレーションしてみよう。それは素朴な体験論を超えた頭脳的な訓練といえます。どうしてそのような問題が起きたのか。背景には何ががあるのか、そこに見え隠れする、対立する構造」について感じ、考えたことを声に出して話し合ってみることが大切です。

遠い出来事のように思えることでも、実は同じような事象は素外身近に存在するものです。例えば東京近郊部のある小学校では約6割の子どもが外国籍だそうです。当然そこでは他文化と共生する課題を感じているはずで、身近な「共生」という観点から見れば、高齢者と若者や障害者と健常者、加害者と被害者、IT社会における適応者と不適応者、さらには人間活動と生態系を含む環境との関係などいろいろな面において、共生の必要性がイメージされるはずで、それぞれが異なる他者の存在を意識していることが大切なのです。

善意が理解されるという経験が、糧になる

「昨夏、旧山古志村でのボランティア活動が行われました。短期間の募集にも関わらず350名もの希望者が集まり、参加した学生の多くが継続してボランティアに取り組みと聞いています。

山古志村への皆さんの協力は本当に素晴らしいものでした。年々ボランティアに関心をもち学生は増えていきます。ボランティアは自発的なものであり、誰かに感謝されるためだけにやるものではない。結果として喜んでくれる人がいて自分が役に立つたとか、異なる他者を実際に感じる経験が、具体的な共生の糧となるのではないのでしょうか。

「共生学」の構築に向けて

「なぜいま、共生」というキーワードがクロズアップされるようになったのでしょうか。

「勝ち組」「負け組」「格差社会」...そんな言葉をよく目にする時代、いま多くの人々が生活実感として世の中が「極化」していると感じているようです。身近な生活の中でもなんとなく感じられる不公平・不平等。さらにもっと広い社会に目を向ければ、人種・性別・年齢・国・地域などあらゆるもの間で対立が生じています。本来は、自分の幸せの追求のためにそれぞれが努力したはずのことがどこかで行き過ぎてしまつて、全体を不幸にしてしまつたのかも知れません。

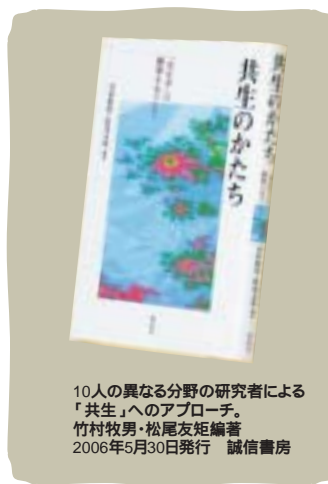
欧米型の自由と競争の理念は今日、グローバルスタンダード(世界標準)とされてきました。しかし、過剰な競争原理の中では差別感だけが強調されることになり、いざかしの元になります。競争原理、経済発展と共存するもうひとつの価値。それはとても人間の相互扶助などの考え方です。「共生」という言葉が目につくようになったのは、みなその必要性に気がつき始めたからでしょう。

「共生学」という学問の構築を東洋大学が行つたこと、この社会的な意義はどこにあるとお考えですか。学生にはこの「共生」の問題をどのように意識してはほしいですか。

「共生」を表す英語には定着したものがなく、人と人との関係性あるいは人と自然との関係性を重んじる東洋思想に根ざすことばだといえます。「共生」という考え方を私たちは、東洋の

Q6. 今、関心を持っている社会問題は?

カテゴリー	出来事・問題
社会現象	格差社会 / 自殺者増加 / ニート / 虐待
政治 / 国際問題	拉致 / 米軍基地移転、再編 / 北朝鮮の核 / 米中韓外交 / 年金 / 他国の紛争と争乱 / 日朝韓の領土と歴史 / テロ / 発展途上国と貧困 / アジア近隣諸国の反日感情
事件・事故	幼児への犯罪多発 / 殺人増加と低年齢化 / 高齢者を狙った詐欺激増 / 親による子の殺人



10人の異なる分野の研究者による「共生」へのアプローチ。竹村牧男・松尾友矩編著 2006年5月30日発行 誠信書房



「共生学の構築」をはじめとした教学改革プログラムを学長ホームページで公開しています。
<http://www.toyo.ac.jp/president/index.html>

社会の中の共生

誰もが支援を必要とするようになったリスク社会。多様性を認め合い、「社会」と「経済」のバランスを「共生」のカギに



須田木 綿子
社会学部教授(社会福祉学)

かつて、生活問題の背景には貧困があり、社会福祉とはその一定層の人々を支えるためのものでした。ところが、いわゆるリスク構造の変化で、介護とそれに伴う家庭崩壊など、誰もが人生の危機に直面し得るようになりました。求められる支援の内容も変化しています。しかし行政のみでは現状に対応しきれず、伝統的な支援組織も弱体化する中で、民間組織に新たな役割が期待されています。

とはいえ、民間組織にも課題があります。私の専門である「介護」を例に挙げると、民間の介護会社は、良いケアを提供しようとしてもビジネスとして成り立たないことが多いのです。私は現在、都内の約200の介護保険指定事業者インタビュー調査を行っています。市場原理が導入された領域で、良質の公的対人サービスをどのように提供していくのか？公益と自由経済、「共生と競争」という異なる価値を両立させる方策を見出したいと思っています。近年では、「ソーシャル・エコノミー」という新しい理念も提案されており、課題への関心は深まるばかりです。

もうひとつ考慮すべきこととして、格差のない社会は存在しないという事実があると思います。その中で共生を実現するためには、異質なものが互いの存在を認め、助け合わなければならない。多元的な価値観を制度の中にどう活かすかも、ともに生きる社会をつくるための大きな課題ではないでしょうか。

老老介護に疲れて寝たぎりの配偶者を殺したり、介護がきっかけで離婚してしまったり。昔は、嫁が介護の重責を担い、それを地域や親族が支える仕組みがありました。しかし今は、介護というストレスで簡単に家族が崩壊し、関係者の人生も破綻してしまう。こんな例が増えています。

デザイン
岡田明氏
「六相田融養ろくそうえんゆめい」より

いま、なぜ「共生」を目指すのか

東洋大学での「共生学」研究の要を担う竹村牧男文学部教授のほか、3名の先生方に専門の領域でいま、何が課題となっているか、その課題と「共生」との結びつきについてお話をいただきました。もちろん、「共生」の視点が求められるのは、「ここ」にあげたいいくつかの事象にとどまるものではありません。人と人が関わるそこにはおそろしく全て。



竹村 牧男
文学部教授(仏教哲学)

共同研究(特定課題)『「共生学」の構築』研究代表
「東洋大学」エコ・フィロソフィ・学際研究イニシアティブ」グループリーダー

「共生」というキーワードこそ、いま、私たちが渴望する、「新しい社会モデル」の光

仏教に由来する「もいき」という言葉があります。現代風というと「共生」。仏教や中国哲学をはじめとする東洋思想には、その根底に「つながりあり」「平等な命」があります。人間社会において、どのようにすれば誰もが生き生きと生きていけるかという問いは、閉塞した現代社会のなかで、きわめて切実な問いであるといえるでしょう。合理主義と競争原理に導かれる現代社会には、もはや一人や一企業ではどうすることもできない多くの問題が山積しています。例えば大量消費の陰の大量廃棄と環境汚染、温暖化等による、地球の危機、あるいはまた、いま盛んにいわれる「格差社会」などの言葉も、そうした社会が産み出したものといえるでしょう。効率と業績だけが追求され、生産性が向上して便利になったかもしれないかもしれませんが、「一人ひとりの人間は心豊かといえませんか？」という問い、社会システムの「負」の部分克服するためには、個人の意味と価値を掘り下げ、他者とのかわりの中の自己を見直すことが必要です。

共生とは、けつして人々を同一化、同質化することは違います。また競争がなくなれば、淀み濁るのも事実です。ただ、行き過ぎた競争主義に対しては、「もいき」を根底に持つ「東洋の知」も参考にしつつ、一人ひとりが自立し、かつ連帯して、豊かな社会を創ることができるよう立場を探索すべきです。そして、個性や立場の違いを超えて、相手を尊重できるような原理を見出していくべきです。東洋大学ではいま、その究明を、「共生学」という学問の構築のなかで果たそうとしています。21世紀を拓く、「もいつ」の価値を模索しているのです。

「共生学」とは単に理念的なものでなく、人文・社会・自然のさまざまな学問が協働して、具体的に「共生」を可能にする社会システムを考えていく、学際的な学問です。「共生」という言葉がさまざまな場面で公的に語られるようになったいまこそ、その「共生」の実現のために、何をどうしなければいけないのか、皆さんも考えてみませんか。

松元明弘 工学部教授(ロボット工学)

科学技術との共生

ロボットが「人間社会」に入って活躍する時代。もはや人間と対等の役割になり得る今日、「共生」の問題が浮かび上がる。



「自然」といって皆さんは何を思われますか。緑あふれる森?せせらぎの音が聞こえる川?そんなイメージを持っているのではないのでしょうか。しかし、地球上では人間が管理している自然がほとんど。人間の都合に合わせて、自然を変化させてきた歴史があります。近代化の過程で進んだ自然破壊。もはや本来の自然を破壊しなければ、現代の人間活動を維持できず、人間自身が「加害者」として原因に深く関わりながら、一方で破壊された自然の「被害者」にもなり得るといふ複雑な構造をはらむのが環境問題です。オゾン層の破壊や、海面の上昇など、目に見える危機が迫って初めて行き過ぎた破壊に気づいたのです。

本来の自然を取り戻すには、今後長い間世代を超えてその解決に努力していかなければなりません。「環境と共生する」とは、本来の自然を回復すると同時に、暮らしを便利にするという人間の本性との両立を示すこと。「人工環境」「自然環境」と「人間」をトライアングルで考えることが重要です。

近年、各地の学校で「環境学習」と呼ばれる教育実践が多く行われています。それぞれの地域・国・村などの歴史を学び、自然とどう付き合ってきたか、どのように自然を造り変えてきたかを学ぶことが大切です。歴史の中から生まれた景観を大切に、その結果を継承していくことにより、その地域があるべき本来の姿に近づいていくのでは、という考え方に基づくものです。

環境問題はあらゆるジャンルの中で最も「共生」を意識できるものです。まずは「自分のふるさとを大切にしたい」という思いに立ち返るとき、何をすべきか見えてくるものがあるはずです。より具体的なアクションが早急に求められています。

従来、ロボットに求める役割は、人間にない力を機械の力でアシストすることでした。生産ラインの流れの中で、同じ作業を繰り返したり、大きな力でものを運ぶなど、いわゆる産業用ロボットが主たるものでした。

ところが、ロボットに対するニーズは近年大きく変化してきました。最近ではアシモやアイボなど、ヒト型・動物型の機械を思い浮かべると思いますが、「彼ら」はかつてとはまるで違った目的のもとに作られたロボットです。例えば、癒し。分野でいうと福祉や介護、家庭用など、ただ黙々と作業をこなすのではなく、使う人のことを考え、人の心に寄り添う「ロボット」が求められつつあります。かたちはどうあれ、身近に人と接するようなタイプのものが増え、「人間社会」に入って活躍していくことが予想されます。

たとえば、介護ロボットを想像してみてください。対象となる「ヒト」にはあらゆるケースがあり、それに対応できるセンサー、計測判断など、法律や保険などの社会的な側面、加えて容姿や形態などの心理的な側面なども問題になります。人間と、ロボットとが共存するためには新たな社会的整備が必要だといことがイメージできると思っています。従来メカトロラスのみの領域だったものが、人間工学、心理学、社会学、経済学、生理学、医学などあらゆる学問領域にわたるようになってきたのです。

ロボットの本来とは何か? 私たちはロボットに何を求めるのか? ロボットと人間とはいかに「共生」するのか? いま、ロボットづくりに必要な問いが求められています。

環境との共生

本来の自然の姿を守る。生活を便利で豊かにする。方向性の違う2つの性を、共生させるのはふるさとへの視点



長濱 元
国際地域学部教授(社会学、環境教育)